

2024年6月2日（聖霊降臨後第2主日、特定4、B年）

牧師メッセージ

「そこに愛はあるのかい？」

（マルコによる福音書 2:23-3:6）

司祭ヨセフ太田信三

わたしは野島伸司という脚本家のドラマ作品がとても好きです。名作ばかりなのですが、今日の箇所を読み思い出したのが、「ひとつ屋根の下」というドラマのセリフです。生き別れになっていた兄妹が一緒に暮らすようになり、さまざまな困難がありながらも、家族になっていく話です。思い出したのは、江口洋介さん演じる長男の口癖、「そこに愛はあるのかい？」というセリフです。食べるのを楽しみにしていたプリンを弟が食べてしまった時などのコミカルな場面から、涙ながらに力を込めて言うシリアスな場面まで、「そこに愛があるか？」と長男はいつも問いかけるのです。なぜこの言葉を思い出したかというと、今日の福音での、「安息日は人のためにあるのであって、人が安息日のためにあるのではない」というイエスの言葉が、わたしには「そこに愛はあるのかい？」という問いかけに聞こえたからです。

イエスが生きた時代、厳格なユダヤ教徒であるファリサイ派を中心に、人々は律法を実生活に落とし込み、より細分化した規則を作り、それを守ることで神様のみ心に叶う生き方を目指しました。しかし、規則を文言通り守ることにばかり気を取られ、律法に込められた神の思い、愛を見失ってしまいました。結果的に、せっかく神が与えてくださった律法を、人は互いを裁く道具にしてしまいました。その人々に向かってイエスは、「安息日は、人のために定められた。人が安息日のためにあるのではない。」という言葉をかけました。後半の手の萎えた人を癒す場面でもそうですが、愛を見失ってしまった人間に向かって、イエスはいつでも「そこに愛はあるのか？」と問いかけるのです。

安息日とは、神が世界を創造し、七日目にお休みされて、すべての被造物を祝福した日のことです。ですから本来、安息日は神がわたしたちすべての命を祝福してくださっていることをあらためて感じ、疲れてしまった命を神の祝福で再び満たしていただく日です。神は人のことを愛し、すべての命を大切するからこそ、十戒のなかでこの安息日を守るようにと決めました。み言葉や掟と言われるものすべてに、神の愛が込められています。そこにある愛をこそ大切に、見失わずに歩んでまいりたいと願います。